

書として出版されたもので、市販はされていない。

本書は、なによりもまず、タイの学者が、アメリカの東南アジア政策に、学問的に真正面から取り組んだ、恐らくはじめての試みとして注目される。

筆者は、アメリカの東南アジア政策の展開を、

- (1) non-involvement の時代 1945—1949,
- (2) cooperation の時代 1950—1954,
- (3) commitment の時代 1955—1960,

と3つの時期にわけて、タイ、ビルマ、インドシナの3国家地域を題材として、論じている。筆者は、概念図式として、interests→objectives→policiesの3つの概念のセットを駆使している。論理の展開は明確だし、文章も簡潔でクリアである。そのクリアな点は、本書の優れた特長のひとつであろう。また、豊富な文献をフルに駆使しているので、質的な厚味がでている点も評価したい。

筆者は、1945年から1960年にかけてのアメリカの政策に、つぎの5つの特徴を見出している。第1は、確固たる原則をもって臨むべき段階(特に1945—1949)に、便宜主義をもって臨み、現地側にいたずらに suspicions を招来せしめた。合衆国にたいする現地の不信任は、植民地主義にはっきりとした原則的態度決定をしなかった40年代にはじまっているという。第2に、アメリカ政府は、非共産主義的な左翼への理解と洞察に欠けている。反共右翼に甘かったのは失敗であったと断じている。第3に、反共政策の方便として、経済発展よりもむしろ軍事力強化という実利政策に流れがちである。第4に、特に1955年以降、現地諸国の歓心を買うために、ドルを乱用する傾向にある。このやり方では、一時的な歓心は買えても長期的な忠誠は買えないという。第5に、アメリカ政府は、自己の万能性への過信、という欠点をもつ。その過信のために、地政学的な謙虚な読みもできなければ、現地の感情に素直に対応する心掛けも忘れがちになっているという。

この5つのコメントはいずれも鋭く、アメリカの政策の盲点を突いていて、大方の共感を買うはずである。

ただ、いささか気になるのは、筆者が、はたして、自分自身の心底の声として、この結論を出したのか、あるいは、タイ国の国家利益を読み込んだ上で、この結論に至ったのか、ということである。私の想像では、合衆国国内の反政府的なさまざまな論調を、本書

はうまく吸収しているのではなかろうか。チャーラー大の若い学者に共通する、極度に没価値的たらんとする姿勢——つきつめると自分自身の価値観を抑制することにつながる姿勢、のかげりを本書にも見てとれる。いずれにせよ、本書のすべての論理展開が、アメリカ的にスマートであり、そこに、チャーラーの政治学部の学風を見ることが可能である。

そのほか、各国の国家利益の捉え方にも一面的なところがあり、また一部の資料操作にも不注意な個所がある。それにも拘らず、やはり、ひとつの風格をもった理論展開は買えるし、高水準の論文として一読に値する。(矢野 暢)

J. Marvin Brown, ed. *AUA Language Center Thai Course*, Book 1. Bangkok: AUA Language Center, 1966. vi+118 p.

新しく出たタイ語の入門書である。本書は教室での授業1時間に対してラボラトリー1½時間の割で進めて、全体を60時間で仕上げるように仕組まれている。ラボラトリーを使用しない場合は50時間で終わることができる。ただし、本書は、“Book 1”と示されているように、1冊だけでタイ語の全体を身につけたものではなく、ほんとうの入門段階だけを身につけたものである。さらに高い段階を習うには Book 2, Book 3 と進まなければならない。

全体は Introduction と 22 の Lessons よりなる。まず Introduction で全体の方針、およびタイ語の音素体系、表記法について説明する。各 Lesson は (1) Tone Practice, (2) Expansions, (3) Patterns, (4) Dialog, (5) Consonant Contrast, (6) Tone Contrast, (7) Taped Drills, (8) Numbers, (9) Thai Writing System と 9 つの sections より成る。本書の特色として、Tone の練習の際、単調な発音練習とちがって、色々な入れかえ練習や、応答練習を用いている点をあげることができる。例えばタイ語における 5 つの tones を練習するのに、ただこれらを並べるだけでなく、/dii máj/, /jùu máj/, /dāj máj/, /róon máj/, /sūaj máj/ というような入れかえによる練習をさせる。Tone Practice のみならず、他の sections もすべて、理論的な説明はいっさいはぶき、くりかえし訓練させることを目指している。本書の各

lesson を徹底的に master すれば、かなり能率よくタイ語の話し言葉を習うことができるであろう。

ただ忘れてならないことは、本書が英語を母国語とする者のために書かれたものであると言う点、および native speaker の指導のもとに教室で使用されることを予想するもので、ほんとうの意味での「独習書」ではないと言う点である。したがって、日本人からみれば説明不足な点とか、あるいは分り切ったことをくどくど説明している点などが目につくのは仕方ないだろう。また、本書を native speaker の助けなしに全くの独習用に使用しても、おそらく大した効果は得られないであろう。この点をよくわきまえ、適当な指導者なりすぐれた録音テープなりがあれば、日本人でも充分使用することができるであろう。

本書をざっと読み通して感じられることは、やはり、アメリカにおける言語教授法の発達と言うことである。一見何でもなさそうな本であるが、実に能率よく憶えるように仕込まれている。ややこしい理論をくどくどと説明するのでもなければ、ただ「慣れる憶える」と言うわけでもない。本書の編集者が、科学的な言語学の知識を身につけた人であることはすぐわかるであろう。しかし、その知識を言語学習と言う実目的のためにうまく利用しており、決して言語学を教えようとはしていない。新しい教授法に対する批判は色々あるだろうが、少なくとも今までのものよりはすぐれていることは事実である。(桂満希郎)

David E. Sopher. *The Sea Nomads, A Study based on the Literature of the Maritime Boat People of Southeast Asia*. (Memoirs of the National Museum, No.5) Singapore : The National Museum, 1965. x+422 p.

本書は、東南アジア島嶼部沿岸において、家族ごと舟の上に住みながら沿岸を“nomad”のように移動していく生活を送る民の文献的な研究である。従来このような民を呼称するのに Sea Gypsies とか Orang Laut とかを使用することが多かったが、著者はこれら全部を総称する語として“Sea Nomads”を採用する。この海上放浪民に接近して調査するのは極めて困難なことであり、文献資料も旅行記、行政誌などの片隅に思いがけなく見出されるものが多かっただけに、

この文献資料の集成をはかった本書は、大変貴重なものであろう。

内容は5部にわかれている。第1部は、環境条件すなわち生態学的な考察をマレーシア(広義の)における strand, sea について行なっている。環境条件によって(1) Sea Nomads, (2) Strand Folk, (3) Forest People に大きく、“primitive”文化を有する民が三分されることは著者の地理的前提である。

第2部と第3部は、いわば「現代研究」であって、19世紀・20世紀の文献を中心として Nomadic Boat People の記述と比較を試みている。なかでも第2部の各海上放浪民の記述は著者の意図はともかく、本書の中核をなすものであって、情報源、呼び名、分布範囲、経済、文化的特徴などについて、できる限りの情報を集成してある。彼の研究によれば、地域的には、

(1) マレー半島西岸グループ (Mawken, Orang Laut Kappir) (2) 南支那海グループ (a. Riouw-Lingga Arch. & Adjoining Coasts : Orang Laut Pesukuan, Orang Seletar ; b. The Pulau Tujuh : Orang Laut ; c. Bangka, Billiton & Adjacent Coasts : Sekah, Suku Juru.) (3) 北ボルネオ・スールー諸島グループ (Bajaus, Lutangos, Samals) (4) 東インドネシアグループ (Bajaus, Orang Johor, Turijene, Wong Kambang) の4つに大きく分けられる。第3部の物質的・文化的特徴の比較分析は、資料の不完全さにさまたげられて彼の思うように分析されないのは気の毒である。

第4部は、歴史的な概観であって、19世紀以前の資料を、イギリス・オランダ・スペイン・ポルトガルおよび二次資料ではあるが、1500年以前の中国・アラビアの文献も参照している。

以上のような記述・分析比較・歴史的展望を終えてから、結論として、海上放浪民の移動と起源との考察をする。この仕事は、海上放浪民文化の再建設ということを経験としたものではあるが、「文化史再構築」学者の飛び越えた結論というものを持ち出すのではなく、操作できる資料で得られる結論のみを読者に呈示している。リオー・リング、バンカ・ピリトン諸島附近および南西セレベス沿岸の2地域を移動の源となった地域として設定するのも妥当な帰納といえる。

問題の焦点は、文化接触、文化変容ということにしばられそうであるが、著者が最後のページで僅かに言